

令和8年度 研究課題追及の指針

1. はじめに

社会は今、Society 5.0の実現に向けた高度技術の導入、GIGAスクール構想による「1人1台端末」の日常化、そして生成AIの活用といった教育DXの荒波の中にあります。同時に、教職員の働き方改革やウェルビーイングの向上も喫緊の課題です。本指針は、第14期全国統一研究主題を受け、長崎県の子供たちが予測困難な時代を生き抜く力を身に付けるとともに、教師も生き生きと働ける「魅力ある学校づくり」を推進するための研究の方向性を示すものです。

2. 第14期 全国統一研究主題

「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

主題に迫る2つの視点

「持続可能な社会の創り手の育成」(2040年以降の社会を見据えた教育)

「ウェルビーイングの向上」(日本社会に根差した身体的・精神的・社会的な幸福)

3. 研究主題の理念と目指す姿

本期は、第13期の成果を継承しつつ、第4期教育振興基本計画の方針を色濃く反映させ、さらなる深化・発展を目指します。

(1) 「未来を切り拓く力」の定義

単に知識を習得するだけでなく、以下の資質・能力を育むことを目指します。自らの個性を発揮し、自信を持って未来を手繰り寄せる力。困難な課題に対し、自ら考え、判断し、積極的に対応する力。人との絆を大切にし、多様な他者と協働しながら新しい価値を創造する力。

(2) 「魅力ある学校づくり」の多角的な展開

- ・子供にとって：安心して教育を受け、個々の力を最大限に発揮できる場。
- ・保護者・地域にとって：信頼され、「地域とともにある学校」として開かれた場。
- ・教師にとって：適切なワークライフバランスが保たれ、働きがいを実感できる場。

4. 教頭としての職責と研究の構え

学校運営の要である副校長・教頭には、リーダーシップの発揮と職務遂行への強い自覚が求められます。本指針では、以下の3つの姿勢を重視します。

- ①開かれた大会：外部専門家との対話や情報発信を通じ、学校の現状を社会へ届ける（外に開く）。研修成果を自校の教職員へ還元する（内に開く）。
- ②代表参加制：各単位教頭会の代表としての使命感を持ち、質の高い議論を通じて職能を高め、その成果を組織全体で共有・還流させる
- ③参加型の分科会：参加者自身が主体的な学習者となり、双方向の対話を通じて、校内研修や授業改善に直結する知見を深める。

5. 具体的な研究の 5 つの課題

以下の全国共通研究課題に基づき、第 13 期からの引き継がれる「自立・協働・創造」をキーワードとして研究を深めます。

第 1 課題：教育課程に関する課題

第 2 課題：子供の発達に関する課題

第 3 課題：教育環境整備に関する課題

第 4 課題：組織・運営に関する課題

第 5 課題：教職員の専門性に関する課題

6. 結びに

今年度から第 14 期全国統一研究主題がスタートします。令和 6 年 4 月本件は、「第四期長崎県教育振興基本計画」が制定され、「つながりが創る豊かな教育」をテーマに掲げ、学校・家庭・地域をはじめたような関係者が「つながり」を深めながら地域総がかりで教育を進めることを目指しています。学校において、「人づくり」「学校づくり」「地域づくり」それぞれ「つながり」の核となる実務的な役割を担うのは、副校長・教頭であり、県の施策を各学校の実態に合わせながら運用していく責務を担っています。そのためにも本研究活動で培ってきた 5 つの課題に対する研究成果を実践することが期待されます。

本年度は、島原市有明総合文化会館（グリーンウェーブ）を中心に、第 62 回「南島原・島原・雲仙研究大会」が開催されます。第 14 期の初年度として、各市町教頭会の研究成果や提案をもとに、長崎県の副校長・教頭が一丸となって協議を深められるよう、格段のご協力をお願い申し上げます。あわせて、開催に向けた企画・準備に携わっている皆様、ならびに研究発表の準備を進めておられる各地区の先生方に、心より感謝申し上げます。長崎県教頭会としての決意教育環境が激変する今こそ、私たち教頭が「研究と修養」を深める意義があります。「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を共有し、子供たちが笑顔で通い、教師が誇りを持って教壇に立てる学校を創り上げるため、組織的・継続的な研究を推進していきましょう。

令和 8 年 8 月 3 日

長崎県公立学校教頭会
研究部長 射場 正樹
(長崎市立神浦小学校)